

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学理学部1年 隅田 莉央

①学習成果

幼少期より世界の歴史や文化に興味・関心があった私は、スペイン語圏出身の友人に出会ったことをきっかけに中南米の歴史や文化、そしてスペイン語への興味・関心が特に高まった。スペイン語の学習を続けるうちにスペイン本国の歴史や文化への関心も高まり、スペインの歴史・文化の講義や現地へ渡航と交流が含まれた本プログラムへの参加を決めた。

プログラム参加前では、単純に「バルセロナ」はスペインの都市の1つであり、強いサッカーチームで有名、という程度の認識であった。渡航前の一連の講義にて、バルセロナはカタルーニャ自治州の州都であってカタルーニャ語という独自の言語を有し、また複雑な歴史的・文化的背景も持つことを学んだ。スペイン人というアイデンティティに疑問を持つ人やスペインの一部であることに否定的な感情を持つ人も少なくないということは驚きであった。興味や関心がありながらも基本的な歴史も知らずにいた自分が恥ずかしかった。しかし、この経験が後々のカタルーニャ語・スペイン語の学習、またバルセロナ滞在時の振る舞いへの取り組みや考え方に良い変化をもたらしたと考えている。

バルセロナ滞在は2週間もなかったが、様々な刺激や貴重な経験があり、学んだことは多かった。そのうち主要な3つを記す。

まず、文化と歴史、言語の学習についてである。少しでも学習することで、本当に見え方・感じ方・関わり方が変化することを実感した。例えば、市場やスーパーでの買い物などのちょっとした会話では、英語・スペイン語・カタルーニャ語をつかった場合のそれぞれで相手の表情や対応が大きく変わっていた。バルセロナは観光地であり、英語がある程度通じるが、英語を使わず、特にカタルーニャ語を使ったときの相手の笑顔が印象的であった。また、挨拶や食事のマナーなどの習慣も地元の方から教わり気を付けるようになってから、やり取りが円滑に進むようになった。さらに、文化や歴史について事前に知識学習があったおかげで、観光・散策時にふと目にするモチーフなどもその背景まで想起され、より深く愉しむことができた。

続いて、「当たり前」についてである。もちろん、場所が変われば文化・歴史・習慣なども異なることは承知していた。渡航前に書籍やインターネットなどでスペインの日常生活でのマナーや習慣についてある程度調べた。日本と異なる生活習慣や食事マナーなど、注意が必要な場面も確認していた。しかし、実際に滞在中で、確認できていたのは氷山の一角であり「当たり前」すぎて表立って指摘されない暗黙の了解が非常に多いことに気づかされた。幸いにも温和に指摘してくれる方が多く、トラブルに巻き込まれることはなかったが、無意識に相手に不快感を与えてしまった場面があったようだ。講義や読書などを通じて知ることは、自身の価値観の見直しや異文化の理解のために有意義であることは確かである。その一方で、自身の経験に基づいておらず表面的な概観に留まるため、実際にその文化圏に身を置き、時間を過ごす中で得られる「想定外」の経験が、段違いの気づきや学びをもたらすと考える。様々なコストがかかるが、直接見聞きし肌で感じることで真の相互理解や自身の現状の評価、そして今後の取り組みの方針決定に重要であると再認識した。

そして、教養の大切さである。一般に、教養とされるものは必ずしも日常生活に必須のものではないとされることが多い。例えば、私が生物学分野の研究者になるという将来の夢を実現するためには、スペイン語・カタルーニャ語運用能力を身に着けること、また、スペインの文化や歴史について学ぶことは必須ではなく、これらが直接役に立つ可能性も低いだろう。しかし、教養としての知識は様々な人々との意見交換や交流の大きな助けになること、また、意見交換や交流は新たな視点や気づきをもたらし、人生や考え方を豊かにすることをバルセロナ大学の学生との交流で強く感じた。日本とスペインの文化的・歴史的背景の比較で盛り上がる、習慣や考え方

の分析・討論をするなどといった場面があったが、それぞれある程度以上の教養知識がなければ実現しなかった。さらに、注意すべき振る舞いや話題などもある程度認識することができたおかげで、大きなトラブルを避けられたように思う。人生や価値観を豊かにしうる、様々な背景を持つ人々との交流の助けとなる点に教養の一つの意義を見出せたと考えている。

本プログラムが終了する以上、スペイン語・カタルーニャ語の運用能力、あるいはスペインの文化・歴史についてより深く学習することは必須ではないだろう。しかし、実際の滞在を通してますますスペイン語やカタルーニャ語でコミュニケーションを取りたい、文化や歴史についてさらに学びたい、という気持ちが強くなったため、今後も余暇として学習を続けようと考えている。また、スペイン関連の教養に限らず、興味・関心のある分野は自主学習や大学の講義などを通して学びを得たいと考えている。そして、海外留学への関心も高まったため、生物分野の学習・研究を主軸に置きながらも、様々な文化圏に身を置き経験から学びを得ることも見据え、留学の計画を本格的に進めていくつもりである。

②海外での経験

私は今回のプログラムで初めてヨーロッパに滞在することになったため、スペイン、ましてはバルセロナでの滞在は人生初であった。友人や先生方からの話、あるいはインターネットなどの記事から、ある程度スペインやバルセロナについての情報を得ていた（つもりであった）。スリが多いため常に注意深くある必要がある、夜は治安が悪いため外出は危険、市場などで日本人は特にぼったくりに遭う、スペイン語やカタルーニャ語を使わない場合に対応が良くない等、否定的な意見・見解も多く、調べるうちに渡航や滞在に関して緊張し、楽しみに思う気持ちが薄れてしまった時期があった。ところが実際に滞在し、街中を散策したりお店などで会話したりする中で、無意識に偏った思い込みを持っていたことに気が付いた。確かに盗難事件は日本よりも多いが、ある程度意識して対策をすれば十分に散策を楽しめた。さらに、バルセロナはカタルーニャ語・スペイン語が公用語であるため、初めから英語での対話を求めることに好意的でないのは自然であった。また、挨拶が習慣になっている場面で挨拶をしない人をあまりよく思わないことも道理であった。日ごとに緊張が解けていき、むしろ外向的で明るく、優しい対応をしてくれる人々が多いと感じることが多くなっていった。実際、流暢でないカタルーニャ語・スペイン語で何とか伝えようとすれば必死に理解しようとしてくれ、些細な質問にも丁寧に答えてくれた。私がこの経験から学んだのは、場所が変われば「当たり前」も変わることで、事前の情報収集は大切であるが偏った思い込みを持たないようにすること、そして実際に自分で経験して学びや発見をすること、が大切であるということである。様々なことに挑戦し経験を得る機会のある今の時期に、本プログラムのような機会を有効活用できるようにしたい。

③プログラム内容

スペイン語の授業はスペイン語のレベルや学習歴に応じて2つのクラスに分けられた。文法の授業ではなく実践の授業であり、練習したフレーズを買い物や宿泊の際に実際に用いることができた時は、言葉が通じることの大切さと嬉しさを改めて実感した。しかし、かなり入門的な内容であったため、自主学習や会話コースの履修をしている学生にとっては少しもの足りないという面もあったように考える。

カタルーニャ語の授業は皆が学習歴のほとんどない状態であったため1クラスでの授業であった。文法や単語の意味を少し踏まえながら、自己紹介や日常会話のフレーズを教わった。ペースはかなり早かったが一方向的な授業ではなく、発話の機会がランダムに与えられる双方向アウトプット型の授業であった。授業後は、バルセロナの街を歩いた際に簡単な会話が成立した瞬間や意味の分かるカタルーニャ語の言葉が聞こえた瞬間があり、ここでも言葉が通じる・理解できることの重要さと楽しさを実感できた。カタルーニャ語を勉強しているのか、と驚きや嬉しさを含んだ地元の方の表情がとても印象的であった。

ガイドの方からバルセロナの歴史や文化の話を聞きながら市街を歩くツアーは、個人的な旅行や留学での訪問では知り得なかった歴史・文化的背景や習慣なども学ぶことができた。ドラゴンやバラの花にまつわる伝説や地

域のお祭りの起源などはその代表例である。ツアー以降は、街中でふと目にするシンボルやデザインも単に綺麗・美しいといった感想のみで終わらず、深い意味が加わるようになった。

地元の小学校の訪問では、事前講義で耳にしたカタルーニャ語振興の言語教育の現状の一部を直接確認することができた。国内外からの移住などの理由からスペイン語やカタルーニャ語を用いてのコミュニケーションが困難な子どもたちも多い中、歌や手遊びなどを通して幼少期よりカタルーニャ語に触れ、学ぶ機会を確保しているようだった。大学の講義にてある国や地域の政策や現状などを二次情報として伝え聞くことは容易であるが、実際に現地を訪問し一次情報として見聞きする機会はとても貴重であり、自分の中での理解度が異なることを実感した。

共同発表セミナーでは、京都大学の他の学生やバルセロナ大学の学生と意見交換や討論をする機会が得られた。発表準備に際して日本や京都、スペインやバルセロナの歴史や文化について調査し学習する機会があったのは良かった。考えているよりもあまり京都や日本の文化・歴史について深い理解ができておらず、まして満足に英語やスペイン語で説明することはできない状態にあることを改めて実感した。しかし、プレゼンテーション本番では、準備が不十分であったため上手く発表できなかった点、またスペイン語での発表に挑戦したもののバルセロナ大学の学生の大半がスペイン語を理解しない状態で自動翻訳を介する形式となった点で不満感が残ってしまった。

語学学校の日本語クラスへの参加も貴重な経験であった。語学の授業には、言語学習者として生徒の立場でしか参加経験がなかった。そのため、母語話者として学習をサポートする立場での授業参加、また外国語として学習される日本語を見聞きすることは非常に新鮮であった。言語の運用能力があることと非母語話者に教えられることは全く別のことであり、言語学習のサポートは根気のいる簡単ではないことだと改めて感じた。同時に、自身のルーツのある文化や言語に興味を持ち、意欲的に学習している人がいるのは非常に喜ばしく素晴らしいことだ、と初めて実感した。観光地であるバルセロナで、英語ではなくスペイン語、そして特にカタルーニャ語での会話を試みた時の相手の笑顔、また、同じく観光地の京都で必死に日本語で話そうとしている海外の方を見た時の笑顔の根底には、関心を持たれること・理解しようとされることへの喜びが共通してあるように思う。グローバル化が進むこの世界で互いに尊重し合える、多文化共生社会の実現に向けて、互いの文化を学び、理解しようとするものの意義を改めて確認できたと考えている。

④進路への影響について

幼少期より、特に生物学分野への興味・関心が高く、生物学の研究者になる進路を希望していた。また、京都大学の受験・入学を決める以前は、生物系の分野の研究が先進的であるニュージーランドの大学への入学を考えていた。しかし、高校3年生の春でのニュージーランド短期留学にて、英語の運用能力と国外からの留学者の扱いの不十分さを感じた上、志望した京都大学理学部への入学も実現したため、本プログラム参加前の私は大学での留学に対してあまり積極的ではなかった。

本プログラムに参加する中で、様々なコミュニティに身を置き、実際に経験するなかで学習し理解することの重要を強く感じるようになった。また、留学に関する情報を目にする機会も増え、ニュージーランド以外の国・地域にも、私の関心のある分野の研究が先進的な大学・研究機関があることが分かった。今では時間や費用など様々なコストがかかることは承知のうえでも、大学での海外留学を強く望むようになった。具体的な期間や時期は未定であるものの、留学は必ず実現できるよう、準備にとりかかっている。将来的には、自分に合った環境を日本だけでなく、世界に範囲を広げて探したいと考えている。